

## 特集「私のたからもの」

### 編集部

千里山会の編集に携わっている者の悲願は、出来るだけ多くの会員の皆さんからの寄稿です。と言っても闇雲に「何でもいいですから」とお願いしても、そう簡単に承諾して頂けません。

そこで今までは「\*\*\*について書いて下さい」とお願いしておりました。3年前は丁度終戦70周年と言うこともあり、「私にとつての戦争」と題してお願いすると、多くの方が書いて下さいました。

続いて翌年「私にとつての学校行事（運動会や学芸会）」と題してお願いした折も、結構集まりました。

ところが今回は・・・私の設定テーマが拙かったようで、散々な結果に。

池嶋さんと永岡さんが書いて下さったものを少々強引にこの特集に引き込み、更に私自身が書き、何とか体裁を整えました。

## 歳と共に変わる「たからもの」と

### 永遠の「たからもの」

二七回生 萩原 直大

#### 一、歳と共に変わる「たからもの」

##### ①、小学校低学年時代

幼稚園でのクリスマスに、先生扮するサンタクロースの贈り物。ブリキ製ゼンマ掛けの自動車。幼稚園卒園時に貰った木製の積み木・我が子や孫が持つブロックやレゴと違い、実にシンブルなもの。小さな木の箱の中に納まり、いつまでも大事に扱った。物のない時代のたからものでした。

##### ②、小学校高学年時代

ラムネ（ビー玉）、オハジキ、何故かベツタン（メロン）はそれほど流行らなかった。それは地域の違いか、むしろもう少し年上の岡田さんのミツヒロちゃん、西脇さんのノブちゃん（共に22回生）、加納さんのユーちゃん（23）、北村さんのカツチ

やん(24)までで、岡田さんのケイジちゃん(25)、西脇さんのマーちゃん(26)や徳田さんのゴロちゃんや私(27)はほとんど経験なし。

オハジキを「女の子見たい」と言っただけじゃない。これも男の子の場合はラムネ同様、賭けの対象。2〜3人が自分のオハジキを学校の机の上に置き、相手のものをはじき落とすのである。そうすればそのオハジキは私のもの。但し、相手に当たらず自ら飛び出してしまったら、それは相手のものになる。

私の場合、主将格が居てそれこそ私の『だからもの』。分厚く重く綺麗で貫禄がある。当然強いが、取られることもある。その場合、平格ハジキ3枚を差出し、返してもらおう。ラムネも同じ。

ガラス玉の中にまるでオーロラの様な模様がたなびき綺麗な玉だった。

この頃になると、講談社の「少年少女世界文学全集」の中にある「宝島」が流行っていた。早速真似をし、これらの宝物を栄太郎館の缶に入れて庭に埋めた。まるでタイムカプセルのよう。但し、一週間もしないうちに掘り出していたが。

⑤ その後及び今  
そんな私も結婚し、子供が出来た。そうなるとう当然家庭こそ宝物。そんな時に堺屋太一のデビュー作『油断』を読んだ。これは中東で戦争が起き、日本に石油が全く入ってこなくなるという架空小説。今もそうだが当時はもっと我々の生活の多くが石油に頼っていた。そのため、一辺に我々の生活は明治初期にまで戻ってしまい自給自足の毎日。そこで思ったのは、「俺はいかなる世になつても、この家族に餌を持って帰るぞ。ハイエナから盗んででも、マンモスと戦つても」と誓った。

私の三番目の子が地下鉄サリン事件で被害度6千番目ぐらいの一人となった。その時は万一我が家族に危害を及ぼす奴がいれば、私の手で裁断を下す。その結果死刑になろうともと思った。今も家族は最大の宝物か？ 否、今の私はその宝物のお荷物の方である。

私は根がミハーナなのでそれに相応しい人生を送っている。自分のことで自慢できるものがないので、他人で代用。何故か私が所属した現場に皇太子が(現天皇)が二度、タイの国王が一度、お

### ③ 中学・高校時代

この頃になつても悲しいかな彼女から貰った\*なんてものは全く皆無。それは彼女がくれないからではなく、彼女がいらないから。

図工の時間に多色刷り版画、石膏を削って造った拳骨像、粘土を捏ね焼いて造った茶碗。学校の作品展で佳作賞を取った品が宝物。でも余り器用ではなかつたので、対象は少ない。

### ④ 青春時代(大学・新入社員時代)

クラブ活動、バイト(就職後は仕事)、酒、麻雀で明け暮れた青春時代。「宝物」となるようなものはない。強いて言えば、新入社員時代、私はあの赤レンガで有名な東京駅(丸の内側)の地下駅建設工事に従事していた。そんなある日、同僚が指さす先を見ると、どこかで見慣れた中年女性が、人待ち風に立っていた。彼女が誰かは同僚から教えられたが、あのTVで見ると、小柄で可憐な彼女とはとても思えなかつた。だって大柄で、鳩胸プラス厚い胸板。でも持っていた野帳にサインを求めた。そこに書かれた名前は『兼高かおる』であり、今も大事に保管している。

\* 見えなくなった。この時の写真こそ「宝物」。

\* 昭和49年、首都高速・湾岸線の海底トンネル工事(現・東京港トンネル・お台場―大井埠頭を結ぶ)同57年、袖ヶ浦の東電・東ガスのLNG(液化天然ガス)地下タンク建設現場

\* これらは2つとも、当時皇太子。但し、美智子妃殿下は同行されず。(写真掲載なし)

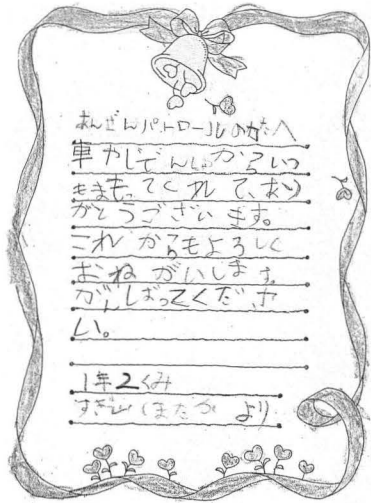
\*

タイ最南端、河の向こうはマレーシアの地で、日本の無償援助工事として、水門建設が行われた。

昭和62年、当時日本の首相であつた中曽根さんが奥様同伴で、この地に着てプミポン国王に日本のプレゼントとして申し入れられた。

次ページ上段の写真は右がプミポン国王、左隣に中曽根当時首相と奥様

下段の写真は、平成2年、水門も完成し、そのオーブニングセレモニーで国王より感謝の握手を求められた私(現地です長として指揮)。



今、最高のたからもの  
 通学児からの感謝状 2通

私は3年前の4月より、通学路  
 にある交差点で、通学児童の交通  
 整理をしています。

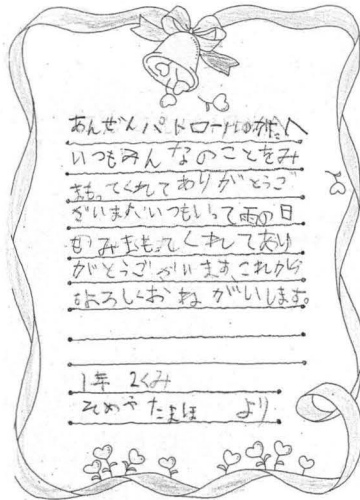
月水金の朝7時から8時までの  
 1時間で、部活の早朝練習がある  
 ためです。

雨の日も雪、強風時も、酷暑・酷  
 暑も 雨、風、風邪、前夜の  
 飲み過ぎにも負けず。



昭和62年 中曽根当時首相ご夫妻と右はプミポン国王

今、松戸では我々の仲間がどえら  
 い犯罪を起こしてくれたために、  
 時に白い目で見られます。  
 親の付き添い登校も増えました。  
 事件のせいではないと思うのですが、  
 朝の挨拶をしない親が多いです。  
 父親はまずほとんど我々を無視。  
**80cm**の棒が付いた旗を持っている  
 ので、それで引叩いてやろう  
 かと思いますが、それはそれでまた  
 大きな問題になるのでしょうかね。



平成2年、10月水門が完成し、国王より握手を求められる私



## 二、永遠のたからもの 千二小での東谷睦子先生と花組の仲間たち

昭和25年千二小に入学した私は、同28年にクラス変えがあり、それからの3年間は、担任が東谷睦子先生で花組だった。

話は少しずれるが、今でも年号を昭和で考える人間のことを『昭和族』と言うそう。今年には昭和92年と言うように。これは私のような人間には実に便利である。と言うのは過去を西暦年号ではなく、昭和で覚えているから。ところが平成に入ると途端に西暦年号で覚えていた。そこで双方にまたがった場合、例えば、私と妻が結婚したのは昭和47年(1972年)。今年

は結婚何年?と突然妻に問われても、92-47=45と。即座に答えることが出来る。「まさか僕が忘れていたと思っているんじゃないよね」と逆に問いたさせる。

これが西暦だと・・・昭和は25を引けばいいが、平成となると・・・

確か東谷先生は、昭和元年生まれと聞き、千二小9

その内に女性陣は結婚―出産―育児、男性陣も就職―転勤―結婚と環境が変わった。

昭和42年から途絶えたクラス会も同62年に復活。その間の20年間も小グループの集まりは先生を中心として続いていた。

久々の62年のクラス会を盛大に開くことが出来たのは、先生がずっと千里山在であったこと、我々が自身の転勤、ご主人の転勤で大阪を離れても、親御さんが千里山在の方が多く、現住所の把握が容易であったことと先生が積極的にその連絡先を調べて下さったこと等がある。更に、私自身がそうであったが、東京で所帯を持っていても親が千里山で暮らしており、盆・正月は必ず帰省した。(因みに我が女房も大阪)

S 63年(1988)―S 65年(1990)―以降は3年毎にS 77年(2002)まで続いた。

その翌年、我々も還暦を迎え、男性陣の多くは定年。その後は少人数の集まりとなって仕舞ったのは、亡くなる方も出始め、特に千里山で生まれ育った家で所帯を持っていた内田勝昭君が亡くなったことが大きい。よく知らない我々の写真など面白おかしくもないでしょうが、その変遷を披露させていただきます。

回生(早生まれ)ではないか?と思っている。

我々が先生の指導を受け、ワイワイガヤガヤやっていたのは、今から実に64年前と言うことになる。この辺りの計算も昭和族にとっても簡単に出来る。

そしてこの60数年間、先生を中心に当時の仲の良さをそのまま維持しているのである。

当時の先生は27-9歳と大ベテラン。でもまだまだ男性社会が色濃く残った時代に、女の先生で高学年の担任はほとんどみられなかった。

更に、我々が教えて頂く頃は既に、勝司先生と結婚されており、恐らく夜な夜な熱き教育論を戦わせておられたのではないかと。

気力、体力、情熱・・・その熱き血潮が多感な我々に伝わらないわけはなく、活気に満ちた日々が今日の我々の仲の良さに繋がっていると確信している。

昭和31年に千二小を卒業し、その後のクラス会は中学時代に数回、高校時代は多分一回。中学卒業後、高校卒業後に就職される方が多い時代、社会人、大学生と、かつての仲間も立場は違う。それでもそんなこと関係なく、昭和40年代はじめてまでクラス会が続いた。

なお、この原稿作成に当たり、その私のたからものである仲間数人に『私のたからもの』を文章でも口頭でもいいから示して下さい。と頼んだ。

すると矢張り、子供、孫がたからものとの答えが多かった。今さら、たからものもないでしょうとの答えもあった。まゝね。わかる気もします。

『妻がたからもの』との男性もいたが、悲しいかな『夫がたからもの』との答えは一つもなかった。

千里山という場所柄の特徴、戦後で何もない時代、その意味で格差のない(お金を含め何も無いのだから)、少なくとも格差を意識しない時代、感受性の強い幼少期、東谷睦子先生と言う核、まあそんなこんながタイミングよく重なったお陰かな?と思っています。

今回の20号は手にされた途端にお気付きと思います。今回の20号は手にされた途端にお気付きと思いが、例年に比べ薄いです。これでも四苦八苦して太くすべく頑張ったのです。そんな折も、今までも色々助けてくれた私のたからもの一人、林裕三さんが寄稿してくれました。



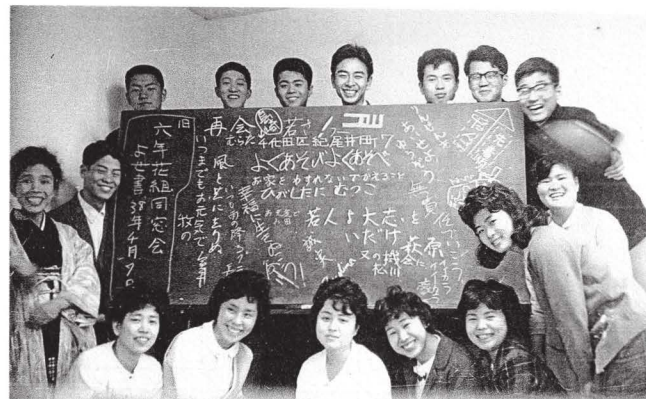
平成 2 年、夏のクラス会：千里阪急ホテルにて



昭和 37 年、夏のクラス会（我が家にて）：私は浪人中



平成 14 年、夏のクラス会（先生の喜寿のお祝い）魚伊にて



昭和 38 年、春のクラス会（千二小・分校にて）私も晴れて大学生に